

枢軸時代——ヤスパースの語る思想の源流

紀元前 500 年頃、中国、インド、西洋で、人類の精神的基礎となる思想が誕生した。これをヤスパースは**枢軸時代**と呼び、世界史の軸となる時代であると考えた。

この世界史の軸は、はっきりいって紀元前五〇〇年頃、八〇〇年から二〇〇年の間に発生した精神的過程にあると思われる。そこに最も深い歴史の切れ目がある。われわれが今日に至るまで、そのような人間として生きてきたところのその人間が発生したのである。この時代が要するに《枢軸時代》と呼ばれるべきものである。この時代には、驚くべき事件が集中的に起こった。シナでは孔子と老子が生まれ、シナ哲学のあらゆる方向が発生し、墨子や荘子や列子や、そのほか無数の人々が思索した、——インドではウパニシャッドが発生し、仏陀が生まれ、懐疑論、唯物論、詭弁術や虚無主義に至るまでのあらゆる哲学的可能性が、シナと同様展開されたのである、イランではゾロアスターが善と悪との闘争という挑戦的な世界像を説いた、——パレスチナでは、エリアからイザイアおよびエレミアをへて、第二イザイアに至る予言者たちが出現した、——ギリシャではホメロスや哲学者たち——パルメニデス、ヘラクレイトス、プラトン——更に悲劇詩人たちや、トゥキディデスおよびアルキメデスが現われた。以上の名前によって輪郭が漠然とながら示されるいっさいが、シナ、インドおよび西洋において、どれもが相互に知り合うことなく、ほぼ同時的にこの数世紀間のうちに発生したのである。

『歴史の起源と目標』（理想社、1964、22 ページから）

解説 ヤスパースの歴史観

ヤスパースは世界史を 4 つの段階に区分する。第一に先史時代、言語、道具、火の使用の始まり。これによって初めて人間が生じた。第二に古代高度文明時代。第三に枢軸時代。それによって人間は、全く開かれた可能性を具えて、精神的に真の人間となった。第四に現代の科学的—技術的時代。

彼は歴史の起源と目標を、《人間の創造》という人類の一つの起源から始まり、近代科学・技術時代の後に真の人間が生成する《精神の永遠の王国》としての新しい第二の枢軸時代の到来、のようにキリスト教的な象徴でとらえている。

略伝

カール・ヤスパースは、1883 年北海近くの都市オルデンブルクに生まれた。父は州立銀行の頭取。幼少の頃から慢性的な気管支拡張症に悩まされるが、病気のため兵役は免れる。19 歳の時ハイデルベルク大学で法学を学ぶが、イタリア旅行の途中に立ち寄った、スイスのシルス=マリアで医学部への転部を決意。医師国家試験に合格した年（24 歳）に親友エルンスト・マイヤーの姉ゲルトルートと知り合い、後に結婚する。マックス・ウェーバーやフッサールと交流し、影響を受けながら、精神医学に現象学的方法を導入した『**精神病理学総論**』を著し、心理学の教授資格を取得する。『世界観の心理学』を発表し、マックス・ウェーバーの死にあたって追悼演説を行った後、哲学に転じて、1922 年ハイデルベルク大学の正教授となる。1931 年、『**現代の精神的状況**』と『**哲学**』全 3 巻を出版、実存哲学を確立した。しかし、1933 年、妻がユダヤ人であることから、大学運営参加から締め出され、37 年には離婚勧告を拒絶したため免職となる。夫婦の強制収容所送致直前に終戦。ハイデルベルク大学に復職した後、スイスのバーゼル大学哲学正教授となる。戦後のヤスパースは、個人の尊厳を重んじるヒューマニズムの立場から歴史や政治や宗教の問題についても積極的に発言した。退職後もバーゼルにとどまり、1969 年死去。バーゼルに埋葬された。

神話的世界観とは

アレクサンドロス大王が愛したホメロスの『イリアス』に描かれる世界観が神話的世界観に他ならない。人間たちの戦争は神々の行いに由来し、その勝敗も神々に左右される。**世界の出来事や人間の運命（モイラ）も神々のわざによるものだという世界観**である。アレクサンドロス大王もエジプトの神殿で自らが神の血を引く**半神（ヘロス＝ヒーロー（英雄））**であるという神託を受け、世界支配を目指したという。

ホメロスの世界とアレクサンドロス——トロイアの祈り

野町啓（2000）『謎の古代都市 アレクサンドリア』講談社現代新書より

先のプルタルコスによると、アレクサンドロスは、単に酒好きの英雄というにとどまらず、大変な読書家であり、とりわけホメロスの『イリアス』を愛好し、学問上の師アリストテレスによる校訂本を、宿敵ダレイオスが所持していたという豪華な小箱（「ナルテコスの小筐」と呼ばれる茴香の一種から作られた貴重品保存用の小箱）に入れ、枕頭の本としていたという。では、なぜ彼がホメロス、ことに『イリアス』を愛読したのであろうか。これに答えるためにも、また『イリアス』と彼、ひいてはアレクサンドリアとの関わりを述べるためにも、まず物語の背景となっている「トロイア戦争」についてふれておかなければならない。

トロイア戦争は、簡単に言ってしまうと、ギリシアきっての美女、ペロポネソス半島南部のラケダイモン（スパルタ）の王メネラオスの妃ヘレネが、エーゲ海をはさんで対岸にある小アジアのトロイア（別名イリオン。なお『イリアス』とは「イリオンにまつわる物語」を意味する）の王子パリスに連れ去られたことに端を発する。しかもこのパリスは、アレクサンドロスとも呼ばれ、当面の主題となっているアレクサンドロスと同名なのである。古代にあっては、同名の人物が多数存在することは別に珍しい現象ではない。例えば、紀元後三世紀頃ディオゲネス・ラエルティオスにより著された『ギリシア哲学者の生涯と教説』という、タレスから始まってエピクロスに至る著名な思想家ごとに一章ずつをあてた書物がある。この本では、各章の末尾を「ところでプラトンという名の人間はほかにもこれこれしかじかの人がいた」という記述で締めている。したがって同名の場合、父親の名や出身地、属する学派を名前につけて区別することになる。アレクサンドロス自身についても、「大王」（メガス）という称号をつけたり、「三世」を付すことが示すように、彼の家系にはアレクサンドロス一世、二世という同名の王がすでにいた。だがパリスとアレクサンドロス大王とは、単に名前にとどまらず、アレクサンドリアの建設に関し伝説上とはいえ、浅からぬ因縁で結ばれてくるのである。

トロイア戦争のそもそもの発端は、オリンポスの最高神ゼウスの意志へと遡る。ある時大地を宰領する女神ガイアが、人間たちに敬神の念が薄らぎ、しかも人口が増えてその重さに耐えられなくなったとゼウスに訴えた。いつの場合でも、人間の数を減少させる最も有効な手段は戦争である。ゼウスの場合も例外ではなく、ひとつ戦争を引き起こそうと考え、次のように事を運んだのである。海神ポセイドンと人間ペレウスの結婚式——ちなみにこの両者の子がアキレウスであり、彼は神と人間の子、つまり半神＝ヘロス（英雄）ということになる——の宴席に諸神は招かれたのに、わざと不和・争いを宰領する女神エリスだけは除かれるように謀った。それを恨んだエリスは、「いちばん美しい女神に」と書かれた黄金の林檎を宴席に投げ入れたため、ゼウスの妻ヘラとアテナ、アフロディテの三女神の間で、誰が最も美しいかをめぐって争いが生じ、ゼウスの命令でパリスの審判を仰ぐことになる。パリスはトロイアの王プリアモスとその妃ヘカベの末子であったが、誕生の時、生かしておくとう王家に禍いをもたらすという予言があり、トルコ西部古代フリュギアのイデ山（ガズ山）の麓に捨てられていたのである。そこでパリスに対し、三女神は、それぞれ、自分をいちばん美しいと判定してくれるなら、ヘラは世界の支配権、アテナは戦争における常勝、アフロディテは美女をあたえることを約束するが、結局パリスはアフロディテに裁定を下すのである。そしていわばその見返りとして、先にふれたラケダイモンの王メネラオスの妃ヘレネを奪い、故国へと帰還するのである。このヘレネを取り戻すため、メネラオスの兄、当時ペロポネオス半島北部アルゴス地方（ミュケナイ）を支配していたアガメムノンを総大将として、ギリシア軍が小アジアの北西部、現在のトルコ領にあるトロイアへと進攻するのがいわゆるトロイア戦争であり、ホメロスの大叙事詩『イリアス』の背景にほかならない。

ここであえて「背景」と言ったのは、現在われわれが手にしている『イリアス』全二四巻、一万五六九三行には、戦争の発端についての明確な叙述はない。その最終巻にほんの数行「パリスの審判」についてふれられているにすぎないからである。そこに展開されているのは、トロイア戦争一〇年目の数十日間、ギリシア方随一の英雄アキレウスと総大将アガメムノンとの戦利品として捕らえられた女性をめぐる確執、親友パトロクロスがトロイア方の総大将、パリスの長兄ヘクトルに討たれたことへのアキレウスの怒りと復讐の物語なのである。トロイア戦争をめぐるのは、現存の書物の形で残されている『イリアス』の他にも、いくつかの物語が「ホメリダイ」（ホメロスの後裔）と称する吟遊詩人たちにより口誦され、口承されてきた。そのほとんどは散逸してしまったが、戦争のこうした発端をテーマとしたものに叙事詩『キュプリア』のあったことが、ヘロドトスにより伝えられている。この叙事詩『キュプリア』自体も伝存しないが、ネオプラトニズムの主要な思想家の一人、紀元後五世紀のプロクロスのある著書にその梗概が記されたことから、われわれは上述のような経緯を知ることができる。しかもこの場合、より正確に言うと、プロクロスのこの本自体も現存してはいない。だが、アレクサンドリアの文献学研究の精神を継承する、コンスタンティノーブルの学者かつ大司教、九世紀のフォティオスの、先のディオドロスと同名の図書館を意味する『ビブリオテケー』の一節に、プロクロスの著書の内容が伝存されており、こうした二重の経路を辿って、トロイア戦争の発端について、どのような物語がなされたかをわれわれは知ることができたのである。

エティエンヌ・ジョラ 《パトロクロスの死の復讐に出かけるアキレウス》



古代ギリシアと神話　そして哲学の誕生

イリアスとオデュッセイア

村田数之亮他『世界の歴史4　ギリシア』（河出書房新社，1989）

ホメロスの詩とは、『イリアス』と『オデュッセイア』の二篇の叙事詩をさす。現在に伝わるその形は、のちに変更されたため、ふたつの詩の作者や時期とともにいくたの問題があるが、それは専門書にまかせておくことにしよう。

まず、『イリアス』を紹介しよう。イリアスとは、トロヤ物語の意味で、トロヤの別名がイリオンである。

怒りをうたえ、女神(ムーサ)よ！　ペレウスの子アキレウスのいまわしい怒りを。あの怒りにそアカイア人に数知れぬわざわいをもたらし、多くの勇士たちの頑強な魂を餌食となし、かくてゼウスの意図が実現されていったのだ。そのはじめ、人びとの王者なるアトレウスの子(アガメムノン)と神々しいアキレウスとが口論し仲違いた、あのときのことから(うたいはじめよ)。(呉茂一訳)

このような高い調子をもって、『イリアス』は、ギリシア軍の総大将アガメムノンとアキレス(アキレウス)との衝突からはじまっていく。

ふたりの争いの原因は、捕虜にした女のことだった。怒ったアキレスが戦線からしりぞくと、ギリシア軍には惨憺たる敗戦がつづいて、勇士たちがつぎつぎに倒れていく。人びとの請いにも応ぜず、アキレスは自分の幕舎にこもって出陣しない。味方の苦境を見かねて、アキレスの友人パトロクロスは、アキレスの武具を借りて戦いに出て奮戦するが、やがて敵将ヘクトルのために殺される。

この友人の死は、アキレスに悲歎と衝撃をあたえた。かれは心をひるがえしてアガメムノンと和解し、敵陣に斬り入る。そして、トロヤの王子にして友人の殺害者であるヘクトルを倒し、その屍をわが戦車のあとに引きずってトロヤ城を三度まわる。トロヤ王プリアモスと一族は、城壁からこれをながめて悲歎にくれる。

ついにプリアモス王は、ある夜ひそかに敵将アキレスの幕舎を訪れて、わが子の屍を返さんことを切々と願う。この願いは受け入れられ、「かようにしてウマをならすヘクトルの葬いを営んだ」ということばでもって二四巻一万五〇〇〇行以上の詩はおわる。

このあらすじからもわかるように、この詩には、壮烈で血なまぐさい戦いや英雄たちの一騎打ちの場面が、もっとも多くくりひろげられる。しかし、その流血や死闘のなかには、陰惨で残忍な感じはない。少なくとも暗鬱さはない。戦いのあいだには勇士たちのこまやかな心情や強い意志がかがやいている。アキレスとパトロクロスの友情、アキレスや友人たちの苦悩や激情とともに、たとえばヘクトルの妻子との別れとか、わが子の屍の引き渡しを乞う父プリアモスの哀切さなど、人間的な情感が豊かにひらめいている。このことは、ギリシア方ばかりでなくトロヤ方にも同様だ。

ギリシア人は、文学でも美術でも、敵も味方も同じように勇敢で高貴で美しいものとしてあrawす。卑劣なものや弱小なものにたいする勝利は讃えるに値しない。尊敬すべき敵に勝ってこそ誇るにたりるのだ。『イリアス』の中の多くの場面に人が打たれるのは、人間の高潔さ、その苦悩や苦闘のなかに高揚する人間の美しさの魅力によるのである。

『オデュッセイア』は、オデュッセウスの物語という意味で、「ムーサよ、聖都トロヤを攻めおとしたのち、いと遠くさすらい、またあまたの人の町々を見、人びとの心を知りたる多技なるその人について我に語り給え(高津春繁訳)」という語ではじまる。

トロヤがおちて諸将が帰国の途につくが、イタカ王のオデュッセウスは、海の神ポセイドンの怒りをまねいて、その乗船が嵐にあたり、難破したりして、一〇年の苦難と数奇にみちた漂泊の旅を続ける。その旅はカリプソの七年からはじまって、巨人キクロペスの国、ハス食い人の国、鬼女神キルケの国から冥界にまでその限りない海による冒険的な流浪がつづく。そのあいだにかれは、つねに本国へ帰ることを熱望するが、神がなかなかそれを許さないのだ。だが、ついにかれは帰国する。かれの留守中に城内に集まっていた妻への求婚者たちを殺し、妻子と会う。

この物語に出てくる国々は、多分に空想的だが、それらの冒険のなかにオデュッセウスの知恵、技倆、胆力ばか

りか、慎重さ、克己、恋情が、この理想的な人間の姿をかりて表現されている。また、トロヤ戦争の一〇年を加えて二〇年間も夫の帰国を待ちわびた妻の貞節と子の苦しみなどが物語を彩っている。

やはりこの詩にも、人間の尊い種々相が展開されているのだ。

怒り嫉妬し策略する。“神”

ホメロスのふたつの詩に描かれた事件は、すべて神が背後にあって糸をひき、その意向によって進行する。戦いの勝敗も英雄の死や負傷も、また航海の成否も最後には神の予定や裁決によって定められる。

人間である英雄は、神意を十分に知ることはできない。しかしかれらは厭世的になることなく、自分の能力のかぎりをつくして、倒れ、あるいは敗れる。かれらの努力は、自己に課せられた義務をあくまでつくすことにむけられる。それは、自主的に決意し、自己に忠実になろうとする努力だ。それはまた、神意にかかわりなく、人間としての存在の主張である。

カオス（混沌）から生まれるコスモス（秩序）——ヘシオドス『神統記』

ヘシオドス、廣川洋一訳『神統記』（岩波文庫、1984）

原初の生成

まず原初にカオスが生じた さてつぎに

胸幅広い大地（ガイア） 雪を戴くオリュンポスの頂に

宮居する八百万（やおよろず）の神々の常久（とこしえ）に揺るぎない御座（みくら）なる大地 と

路広（みちびろ）の大地の奥底にある曖々（あいあい）たるタルタロス

さらに不死の神々のうちでも並びなく美しいエロスが生じたもうた。

この神は四肢の力を萎えさせ 神々と人間ども よろずの者の胸うちの思慮と考え深い心をうち拉（ひし）ぐ。

カオスの子

カオスから 幽冥（エレボス）と暗い夜（ニュクス）が生じた

次によるから 澄明（アイテル）と昼日（ヘメレ）が生じた

夜が幽冥と情愛の契りして身重となり 生みたもうたのである。

「驚異」から始まる哲学 —— アリストテレス『形而上学』

アリストテレス、出隆 訳『形而上学』（岩波文庫、1959）

諸学のうちで最も王者的であり、いずれの隷属的な学よりもいっそう著しく王者的であるのは、おのおのの物事が何のために（何を目的として）なされるべきかを知っているところの学である。そしてこの目的は、そのおのおのにおいてはそれぞれの善であり、全般的には自然全体における最高善である。さて、上述のすべてからして我々の求めているもの（知恵）の名前は、まさにこの同じ学に与えられる。すなわちそれは、**第一の原理や原因を研究する理論（観想）的な学**であらねばならない、というのは、善と正しい目的というのも原因の一種だからである。

ところで、この知恵は制作的ではない。このことは、かつて最初に知恵を愛求した人々のことからみても明らかである。けだし、**驚異することによって人間は、今日でもそうであるがあの最初の場合にもあのように知恵を愛求し（哲学し）始めたのである。**ただしそのはじめには、ごく身近の不思議な事柄に驚異の念を抱き、それからしだいに少しずつ進んで遙かに大きな事象についても疑念を抱くようになったのである。たとえば、月の受ける諸相だの太陽や星の諸態だのについて、あるいはまた全宇宙の生成について。ところで、このように疑念を抱き脅威を感じるものは自分を無知なものだと考える。それゆえに、神話の愛好家もまた或る意味では知恵の愛求者（哲学者）である。というのは神話が驚異さるべき不思議なことどもからなっているからである。

語源——ギリシア語起源の言葉

そもそも、”It was Greek to me.”（「わたしにはちんぷんかんぷんだった」）という台詞がシェークスピアの『ジュリアス・シーザー』の中で使われているように、イギリス人たちにとってもギリシア語は難解な言語だったのである。しかし、英語の中にもギリシア語起源の単語はたくさんある。そして、それはカタカナ日本語の中にもたくさん入り込んでいる。

ギリシア文字

大文字	小文字	名称	音価
A	α	alpha	a
B	β	beta	b
Γ	γ	gamma	g
Δ	δ	delta	d
E	ε	epsilon	e
Z	ζ	zeta	z
H	η	eta	ē
Θ	θ	theta	th
I	ι	iota	i
K	κ	kappa	k(c)
Λ	λ	lambda	l
M	μ	mu	m
N	ν	nu	n
Ξ	ξ	xi	x
O	ο	omicron	o
Π	π	pi	p
P	ρ	rho	r(rh)
Σ	σ	sigma	s
T	τ	tau	t
Υ	υ	upsilon	y
Φ	φ	phi	ph
X	χ	khi	kh(ch)
Ψ	ψ	psi	ps
Ω	ω	omega	ō

ギリシア語語源の言葉

ΦΙΛΟΣΟΦΙΑ (philosophia) phileo = 愛する + sophia = 知恵

⇒ 知恵を愛すること ⇒ philosophy(英語) = 哲学・フィロソフィー

ΦΙΛΟΠΟΝΟΣ (philoponos) = 労働を愛する

⇒ ヒロポン (Philopon) とはメタンフェタミンの商品名であり、覚醒剤と同成分の薬品の名。「疲労をポンと取る」にも掛けている。

フィルハーモニー (philharmonic)

= φιλος (愛好する) + αρμονια (調和)

Sophia University = () 大学

聖母連祷：聖母マリアに神へのとりなしを願う祈り

Sedes sapientiae (羅匈語) = Seat of wisdom = 上智の座

Θ Ε Ω Π Ι Α (thoria) テオリア (観想, 観照, 理論) ← θ ε ω ρ ε ι ν (theorein) 見る
⇒theory () ⇔ () 実践 ← π ρ α σ σ ε ι ν (prassein) 達成する

メソポタミア (Μ ε σ ο π ο τ α μ ι α) ← μ ε σ ο ς (真ん中の) + π ο τ α μ ο ς (河)

cf. hippopotamus () ← ι π π ο ς (馬) + π ο τ α μ ο ς (河)

cf. フィリピン (Philippine) ←フェリペ二世 (Philip) ← Φ ι λ ι π π ο ς ()

写真 (photograph) ← Π Ω Τ Ο Σ (pōtos) 光 + Γ Ρ Α Φ Ω (graphō) 書く

Λ Ο Γ Ο Σ (logos) ロゴス (言葉, 論理, 理性, 理法, キリスト) ← λ ε γ ε ι μ (話す)

⇒logic () -logy (~学)

-logy の英単語を調べよう

astrology : () ← α σ τ ρ ο ν (星)

anthropology : () ← α ν θ ρ ω π ο ς (人間)

⇒フィランソロピー：企業の社会貢献活動 =phileo (愛する) +anthropos (人間)

cosmology : () ← κ ο σ μ ο ς (宇宙, 秩序)

ecology : 環境学 ← ο ι κ ο ς (家)

cf. economy : () = ← ο ι κ ο ς (家) + ν ο μ ι α (管理)

epistemology : () ← ε π ι σ τ η μ η (知識, エピステーメー)

ethnology : (,) ← ε θ ν ο ς (部族)

ideology : (,) ← ι δ ε α (容姿, イデア)

technology : () ← τ ε χ ν η (技術)

zoology : () ← ζ ω ο ν (動物)

cf. ζ ω ο ν π ο λ ι τ ι κ ο ν (zōon politicon 社会的動物)

psychology : () ← ψ υ χ η (魂)

biology : () ← β ι ο ς (生, 生命, 生活)

cf. cynic (キュニク派, 犬儒派, 皮肉屋) ← κ υ ν ι κ ο ς β ι ο ς (犬のような生活)

自然哲学者ピタゴラス

ピタゴラスと豆 寺田寅彦

幾何学を教わった人は誰でもピタゴラスの定理というものの名前ぐらいは覚えているであろう。直角三角形の一番長い辺の上に乗った枡形《ますがた》の面積が他の二つの辺の上に作った二つの枡形の面積の和に等しいというのである。オルダス・ハクスレーの短篇『若きアルキメデス』には百姓の子のギドーが木片の燃えさしで舗道《ほどう》の石の上に図形を描いてこの定理の証明をやっている場面が出て来るのである。また相対性原理を設立したアインシュタインが子供のときに独りでこの定理を見付けたとかいう話が伝えられている。この同じピタゴラスがまた楽音の協和《ハーモニー》と整数の比との関係の発見者であり、宇宙の調和の唱道者であったことはよく知られているようであるが、この同じピタゴラスが豆のために命を失ったという話がディオゲネス・ライルチオスの『哲学者列伝』の中に伝えられている。

このえらい哲学者が日常堅く守っていた色々の戒律の中に「食ってはいけない」というものが色々あった、例えばある二、三の鳥類、それから獣類の心臓、反芻類《はんすうるい》の第一胃、それから魚類ではかながしらなどがいけないものに数えられている外に、豆がいけないことになっている、この「豆」(キュアモス)というのが英語ではビーンと訳してあるのだが、しかしそれが日本にあるどの豆に当るのか、それとも日本にはない豆だか分らないのが遺憾である。それはとにかく、何故その豆がいけないかという理由については色々のことが書いてある。胃の中にガスがたまるからとか、また「生命の呼吸の大部分を分有するから」とか、あるいはまた「食わない方が胃のためによく、安眠が出来るから」とか書いているかと思うと、またアリストテレスの書物を引用して、「豆は生殖器に似ているから、あるいはまた地獄の門のように、ひとりずつがい目が離れて開くから」ともある。何のことかやはりよく分らない。それからまた「宇宙の形をしているから」とか「選挙のときの籤《くじ》に使われる、従って寡頭《かとう》政治を代表するものだから」ともある。

それはさておいて、ピタゴラスの最期についても色々の説があるがその中の一つはこうである。

一日ミロにおける住宅で友人達と会合しあっていたとき誰かがその家に放火した。それは仲間に入れてもらえなかった人の怨恨によるともいわれ、またクロトンの市民等がピタゴラス一派の権勢があまり強すぎて暴君化することを恐れたためともいわれている。とにかくピタゴラスはにげ出して行くうちに運悪く豆畑に行き当たった。そこでかれは、戒律を破って豆畑に進入するよりは殺された方がましだといって逃走をあきらめた。そこへ追付いた敵が彼の咽喉《のど》を切開したというのである。

一方ではまた捕虜になって餓死したとか、世の中が厭《いや》になって断食して死んだとか色々の説があるから本当のことは何だか分らない。しかし豆畑へはいるのがいやでわざわざ殺されたというのが本当だとすると、それは胃に悪いとか安眠を害するとかいうだけではなくて、何かしら信仰ないし迷信的色彩のある禁戒であったであろう。

このピタゴラスの話がまるで嘘であるとしても、昔のギリシャかローマに何かそれに類する「禁戒」「タブー」「物忌《ものい》み」といったようなものがあつたのではないかという疑いをおこさせるには十分である。

この頃、柳田国男氏の「一つ目小僧その他」を見ると一つ目の神様に關して日本の諸地方で色々な植物を「忌む」実例が沢山に列挙されている。その中に胡麻《ごま》や黍《きび》や粟《あわ》や竹やいろいろあつたが、豆はどうであつたか、もう一度よく読み直してみなければ見落したかもしれない。それはいずれにしても、ピタゴラスの豆に対する話はやはりこうした「物忌み」らしく思われるのである。「嫌う」ともちがうし、「こわがる」ともちがう。

故芥川龍之介君が内田百閒《ひゃっけん》君の山高帽をこわがったという有名な話が伝えられている。これは「内田君の山高帽」をこわがったのか「山高帽の内田君」をこわがったのか、そのところははっきりと自分にはわからないが、しかしこの話の神秘的なところが何となくピタゴラスの豆を自分に思い出させるのである。

ピタゴラスはイタリーで長い間地下室に籠っていた後に痩せ衰えて骸骨のようになって出て来た。そうして、自分は地獄へ行って見物して来たと言明して、人々に見て来たあの世のさまを物語って聞かせたら聞くものひどく感動して号泣し、そうして彼はいよいよ神様だということになった。地下室にいた間は母にたのんで現世の出来事に関する詳細なノートをとって、それを届けてもらって読んでいたという話も伝えられている。これではまるで詐欺師であるが、これはおそらく彼の敵のいいふらした作り事であろう。

ピタゴラス派の哲学というものはあるが、ピタゴラスという哲学者は実は架空の人物だとの説もあるそうで、いよいよ心細くなる次第であるが、しかしこのピタゴラスと豆の話は、現在のわれわれの周囲にも日常頻繁に起りつつある人間の悲劇や喜劇の原型《プロトタイプ》であり雛形《モデル》であるとも考えられなくはない。色々の豆のために命を殞《おと》さないまでも色々な損害を甘受する人がなかなか多いように思われるのである。それをほめる人があれば笑う人があり怒る人があり嘆く人がある。ギリシャの昔から日本の現代まで、いろいろの哲学の共存することだけはちっとも変りがないものと見える。

(昭和九年七月『東京日日新聞』)

底本：「寺田寅彦全集 第四巻」岩波書店

百科事典に見るソフィストとソクラテス

ソフィスト sophistes ギリシア語 sophist 英語

紀元前5世紀なかばごろから前4世紀にかけてギリシアで活躍した知識人たちの呼び名。

多くは地方ポリス（都市国家）の出身者で、アテネほかのポリスを巡り、弁論術を中心にさまざまな専門的知識を教授することを職業とした。アブデラのプロタゴラス、レオンティノイのゴルギアス、ケオスのプロディコス、エリスのヒッピアスらが有名である。

民主政のアテネでは、議会や法廷での弁論に優れていることが、政界での、つまり市民としての成功を意味した。ソフィストたちは時代の要求にこたえ、多額の謝礼と引き換えに富家の子弟に演説や論争の技術を授けた。

講義は作文修辞の法のみならず、法律道徳論、文明論などの実質的思想にも及んだ。彼らが徹底的な形で示した言論の魅力は知的な青年たちをとりこにしたが、やがて保守的市民から過激な危険思想家と目されるようになる。ソクラテスの受難も、ソフィストと混同されて市民の反感を買ったことが一因であった。

ソフィストの思想のうち、プロタゴラスの「人間尺度命題」は人間中心主義、主観主義、相対主義の表明とみられ、ゴルギアスの「非存在の論」は知識否定論として、またトラシュマコスの「正義とは強者の利益なり」という説や、アンティフォン、ヒッピアスらの法(ノモス)と自然(ピュシス)の分離論は法や道徳に対する挑戦とみなすことができる。しかし他面では、ゴルギアスの修辞学やプロディコスの類義語用法のように、それ自体としては単に言論の手段を提供するにすぎなかったものが、アテネ市民の野心や欲望と結びついて、このような思想になったともいえよう。

哲学者プラトンはソフィストたちの名を冠した一連の作品を著し、ソクラテスと真理のために、これらの思想と対決しその虚偽を暴いた。個人と国家のために善を図り言論と行為にもっとも有能有力な者となる道を教授するというのがソフィストたちの自称であったが、彼らが実際に教えたものは、善について無知でありながら優れた人間であると思わせる方法であり、事の真偽や正邪を問わず、ただ大衆を扇動して論敵に勝つための技術であった。

ソフィストの語はこうして、詭弁(きべん)の徒を意味することとなり詭弁学派ともいわれた。ただし、事態の裏面をみるならば、ソクラテスとプラトンの哲学はソフィストたちの恐るべき論理から生まれたとも考えられ、その意味で彼らの哲学史上の意義がしばしば再評価される。(田中享英) 小学館

ソクラテス 前470か469-前399

古代ギリシアの哲学者。アテナイのアロペケ区に生まれた。父ソフロニスコス(石彫家)だと伝えられるが、確証はない。母ファイナレテは助産術を心得ていた。クサンティッペと結婚したのはかなり晩年のことで、ソクラテスが死んだとき、3人の子どもはまだ年少であった。有名な悪妻伝説は、おおむね後代の誇張された作り話である。ペロポネソス戦争期に、重装歩兵として北ギリシアに2回、ボイオティアに1回従軍し、賞賛すべき忍耐力と沈着の勇を人々に印象づけた。また、このとき以外にはアテナイの町を離れることがなかったという。若いころには自然研究にもたずさわったが、後年は人間の問題のみに関心を向け、アテナイの街頭や体育場などで対話・問答を行いながら過ごした。彼の魅力的な人格とユーモアに満ちた鋭い論法に共感する若者たちが〈ソクラテスの仲間〉を形成し、プラトンもそのサークルにあって大きな影響を受けた。彼はまた一面において、年少のころから〈ダイモンの(禁止の)声〉を聞き、しばしば深い忘我状態を経験する〈憑(つ)かれた人〉でもあった。ペロポネソス戦争終結から5年後の前399年、不敬神のとがで告発を受け、裁判の結果死刑に処されて生涯を閉じた。彼は何一つ著作しなかった。プラトンの(おもに初期の)対話編のほか、クセノフォンのソクラテス関係著作が、彼の生涯と思想を知るための主要な手がかりである。

ソクラテスは、ソフィストたちの唱道する〈徳〉および世のいわゆる知者たちのもつ〈知〉を根本的に問い直した。そして、〈徳は知〉であり、〈魂への配慮〉としての知の追求こそが真に〈よく生きる=幸福である〉ために何よりも心がけるべきことであると主張するとともに、〈知〉とは本来けっして誤ることのない絶対確実なものであるとすれば、真の知者は神のみであり、われわれ人間は善美の事柄を何一つ確実には知らない存在であると考えた。こうした自覚への機縁となったのは、〈ソクラテス以上の知者はいない〉というデルフォイの神託であった。彼はその意味を解明するために、世に知者と呼ばれている人たちを吟味して歩いた結果、彼らの方は〈何も知らないのに知っていると思ひ込んでいる〉のに対して、彼のみがみずからの無知を自覚している、すなわち〈無知の知〉という一点において相違していることに気づいた。そしてさらに、神託の真意はソクラテスに名を借りてすべての人間の無知を悟らせることにあると考えるに至った。〈徳とは何か〉〈正義とは何か〉といった問いを中心に、人々が知っていると思ひ込んでいる事柄を吟味論駁し、無知を悟らせる活動は、彼が〈神命〉としてみずからに課したものであった。この問答の過程に示された知の基準の厳格さ、論理と方法への明確な意識、〈何であるか〉という問いに込められた本質への指向などは、彼の生死のありかたそのものとともに、哲学に大きな転換と飛躍をもたらす原動力となった。 藤沢 令夫

(C) 1998-2000 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

ソクラテス問題とは何か

自ら著書を残さなかったソクラテスの生涯や思想を、プラトンたちの著作からどのように復元できるのか、あるいはソクラテスを主人公とするプラトンの対話篇の中で、プラトンとソクラテスの思想をどう区別するのかという問題をソクラテス問題という。哲学研究の現場の証言を聞いてみよう。

ソクラテスへの接近 納富信留『哲学者の誕生——ソクラテスをめぐる人々』（ちくま新書、2005）より

ソクラテス自身の営為とそれを書き著した資料との間には、「ソクラテス問題」と呼ばれる困難が横たわっている。プラトンやクセノポンらの書き物から窺われる「ソクラテス」は、それぞれ相異なった姿を示しており、それが実際のソクラテスの行状とどう重なり、どうずれているのか、が研究者を悩ませてきたのである。

「歴史的ソクラテス」の復元は、これまで、具体的には現存著作の四人の著者、アリストパネス、クセノポン、プラトン、アリストテレスの報告をどう評価するか、という問題として論じられてきた。

アリストパネスが前四二三年に上演した『雲』は、ソクラテスについての唯一の同時代資料である。しかし、喜劇としての歪曲ゆえに、この作品が「ソクラテス」復元のために用いられることはほとんどない。この取り扱いには、プラトンが描くソクラテス像からあまりにかけ離れているとの印象が働いている。「哲学者」ソクラテスが採用され、「ソフィスト」ソクラテスが一方的に退けられてきたのである。プラトン『弁明』（19C）での『雲』への否定的な言及も、大きく影響したことであろう。

弟子クセノポンは、とりわけ『ソクラテスの思い出』という貴重な言行録を残したが、そこに表われる「教育者ソクラテス」は、プラトンによる哲学的で強烈なソクラテス像とは対照的である。クセノポンは、十九世紀にはソクラテスについての証言者として尊重されていたが、二十世紀に入ると途端に厳しい評価に曝され、哲学史においてほとんど顧みられない状況が続く。彼の著作への再評価は、ようやくここ数年、一部の研究者の間で顕著になりつつある。

他方で、プラトンの描くソクラテス像にも、著者の天才ゆえに史料的价值への疑念が向けられてきた。たとえば、『パイドン』『国家』『パイドロス』等の対話篇でプラトン自身の「イデア論」をソクラテスの口から語らせているように、あまりに強烈で個性的な哲学が「ソクラテス」復元にはむしろ不都合と考えられたのである。この点では、平凡でも実直に言行を記録したクセノポンの方が、プラトンよりも信頼できるというわけである。しかし、クセノポンがソクラテスの語ったとおりを記録しているという想定も、素朴に過ぎた。たとえば、『饗宴』が叙述する、クセノポン自身がその公話の場に居今わせたという証言は、対話の年代設定からはありそうにないことであった。

第四の証人であるアリストテレスは、ソクラテスに直接の面識がない分、称讃や非難といった感情に左右されていない、と信じられている。「倫理的な事柄への定義」や「帰納法」の案出を彼に帰する記述は、より客観的な哲学評価であると考えられてきた。しかし、アリストテレスの証言はあまりに限定され、ソクラテス像への貢献は多くはない。

この四人の証言の中からもっとも信頼できる像を取り出して「歴史的ソクラテス」を復元するというプログラムは、そういった作業自体への強い懐疑を伴いながらも、結局はクセノポンとプラトンのどちらを優先させるか、端的には、プラトンをどう扱ってそこからソクラテス哲学を取り出すか、という研究課題となってきた。多くの研究者は、プラトン対話篇の中に、実際のソクラテスに由来する「歴史的ソクラテス」と、プラトンの独創による「プラトンのソクラテス」の側面と区別する境界線を引こうとしてきたのである。

この後、筆者はソクラテス問題に対する新しいアプローチを示す。文学部哲学科に興味があり、哲学研究とはどのようなものかを知るためには、この著作を読むことをお勧めする。また、ソクラテスの哲学そのものにも興味がある人は、プラトンの対話篇『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドン』『饗宴』を読むことをお勧めする。

アリストテレスの倫理学——人間の生きる目的と幸福について

■アンパンマンのマーチ 【作詞】 やなせたかし 【作曲】 三木たかし

そうだ うれしいんだ
 生きる よろこび
 たとえ 胸の傷がいたんでも

なんのために 生まれて
なにをして 生きるのか
 こたえられない なんて
 そんなのは いやだ!

今を生きる ことで
 熱い ころろ 燃える
 だから 君は いくんだ
 ほほえんで

そうだ うれしいんだ
 生きる よろこび
 たとえ 胸の傷がいたんでも
 ああ アンパンマン
 やさしい 君は
 いけ! みんなの夢 まもるため

なにが君の しあわせ
なにをして よろこぶ
 わからないまま おわる
 そんなのは いやだ!

忘れないで 夢を
 こぼさないで 涙
 だから 君は とぶんだ
 どこまでも

そうだ おそれないで
 みんなのために
 愛と 勇気だけが ともちさ
 ああ アンパンマン
 やさしい 君は
 いけ! みんなの夢 まもるため

時は はやく すぎる
 光る 星は 消える
 だから 君は いくんだ
 ほほえんで

そうだ うれしいんだ
 生きる よろこび
 たとえ どんな敵が あいてでも
 ああ アンパンマン
 やさしい 君は
 いけ! みんなの夢 まもるため

◆「アンパンマンのマーチ」の歌詞を読んで、あらためて考えることは何？

ワークシート 幸福とは何か 3年 組 番 氏名

◆人間にとって「しあわせ」とはどのようなことだと思いますか。あなたの考えを書いてください。

- グループを作ったら、じゃんけんで発表者を一人決めてください。
 - グループで各メンバーは「しあわせ」についての考えを発表してください。
 - すべてのメンバーが発表した後、その発表を聞いて気づいたことをグループの中で話し合ってみてください。
- ◆あなたのグループでは「しあわせ」とは何かについて、どのようなことに気づきましたか。話し合った内容をまとめてください。

◆【授業の振り返り】あなたの「しあわせ」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

旧約聖書に描かれるイスラエルの民の救いの歴史

■ 天地創造

初めに神は天地を創造した。第1日「光あれ」昼と夜。第2日「大空」天。

第3日「地」草、果実。第4日「太陽、月、星」。第5日 水に群がるもの、鳥。

第6日 地の獣、家畜、土をはうもの、最後に神は自分をかたどって男と女を創造した。(神の [] としての人間) 神は人を祝福して言った。「生めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせ、すべての生き物を支配せよ。」 第7日神は仕事を離れ安息した。

■ アダムとエバ(イヴ)

神は自分に似せて、地の土くれから人を造った。エデンに園を設け、美しく食料となる樹を生えさせ、人を住ませた。神は「すべての樹からとって食べよ。ただし、善悪の知識の樹からは食べてはならない。食べると死ぬからだ。」と命じた。神は人のあばら骨から女を造った。男と女は裸だったが恥ずかしがらなかった。獣の中で最も狡猾な蛇に「それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものになる」とそそのかされて、女は善悪の知識の実を食べ、男にも食べさせた、二人は自分たちが裸であることを知り、無花果(いちじく)の葉で腰をおおった。それを知った神は怒り、女には生みの苦しみを、男には食べ物を得るための苦しみを与えた。エデンの園を追放された二人は [] の支配を受けることになった。

■ カインとアベル

アダムの妻エバはカインを生み、弟アベルを生んだ。アベルは羊飼いとなりカインは土を耕すものとなった。ある日カインは土の実りを神にささげ、アベルは子羊をささげた。神はアベルとその供物に目を留めたが、カインの供物は顧みなかった。カインは激しく怒り、アベルを野原に誘い出し、襲って殺した。カインは神に呪われる者となり、地上をさまようものとなった。

■ ノアの箱舟

すべての肉なるものは墮落し、地上は不法に満ちていた。神は人を造ったことを後悔し、地上から拭い去ることにした。しかし、信仰心をもっていたノアは主の恵みを受ける者となった。神はこういった。「すべての肉なるものを終わらせるときが来た。私は地上に洪水をもたらし、すべての肉なるものを滅ぼす。おまえは箱舟を作って家族とともに入れ。またすべての命あるものを一つがいつつれて入り、お前とともに生き延びるようにしなさい」やがて洪水が起り、水は40日間地上を覆った。すべてが終わったとき、ノアたちだけが残った。箱舟をでたノアは祭壇を作った。神はノアとその子らを祝福して「生めよ、増えよ、地に満ちよ。今後再び洪水によってすべての肉なるものが絶たれることはなく、地を滅ぼすこともないだろう」全世界の人々は、ノアとノアの子([]・ハム・ヤベテ)から出て広がった。

■ バベルの塔

全世界は同じ言葉を話していた。東の方から異動して来た人々がシナルの地に平地を見つけ、住みついた。かれらは「その頂が天にまで達する塔のある町を築き、我々の名を有名にしよう」といい、天に達する塔を共同作業により煉瓦で作った。神はこれを人間の自己神化の試みとみて、以後作業のできないように言葉を混乱させたという。

■ アブラハムの召命

「生まれ故郷を離れ、私が示す土地に行きなさい」という神の命令を受けてアブラム(後にアブラハムと改名)は親族と別れ、妻サライ(後にサラと改名)および彼に同行した甥のロトとともに神の示す地カナンに旅立った。この地でロトと生活圏を分けた後、アブラハム一家はヘブロン付近で過ごしたが、飢饉のためにエジプトに下って難を逃れるなどの苦労を重ねた。アブラハムには、子孫が国民を形成するという契約が神より与えられていたが、約束の子がサライに生まれたとき、アブラハムは100歳で、サライは90歳であったという。後日、アブラハムは神の試練として、このひとり子の [] をいけにえとしてささげるようにとの命令を受けたとき、それに服する姿勢を示して、その信仰のあつさを認められた。アブラハムは〈信仰の父〉として、新約聖書においても尊敬をもって想起されている。

■ ヤコブ

ヤコブはイサクの子とされ、またイスラエル 12 部族の名祖（なおや）であるユダ、ヨセフ、ベニヤミンなど 12 人の息子と娘ディナの父。民族の名祖として、（ ） Israel と呼ばれた。ヤコブは双生児の兄エサウの空腹につけ込んで一杯の煮豆と引替えに長子権を手放させ、また眼のかすんだ父をだまして、長子エサウに与えられるはずの祝福を奪い、彼の報復を逃れて母方の親族アラム人ラバンのもとに身を寄せるが、両者の間でかけひきとだまし合いがなされた。東方への逃避と帰還の途路、ベテルなど各地の聖所で神顕現を体験した。晩年ヨセフを頼って子らとエジプトに下った。ヤコブは従順なアブラハムと対照的で他者と対立し、ずるくふるまうが、他面、神に必死にすがる姿が描かれており、現実的で魅力に富んでいる。

■ エジプトへ

ヤコブの子、ヨセフは父の年寄り子で偏愛され、また王者となる夢を語ったので、兄弟たちのねたみを買ひ、穴(井戸)に落とされる。結局奴隷商人の手に渡り、エジプトの高官の下僕となったが、主人の妻の性的誘惑を拒んで、かえってぬれぎぬを着せられて獄に入れられる。しかし彼の夢解きの才能が王(ファラオ)に認められて出世、エジプトの宰相となって国政に腕を振るう。飢饉のときにエジプトに穀物を買いに下った兄弟たちの誠意を一度試したのち、劇的に再会と和解を果たし、父と兄弟たちをエジプトに移住させた。ヨセフはこの物語では父ヤコブとは対照的に、忠実で愛情と忍耐力に富み、神の導きを信ずる理想的人間像として描かれている

■ モーセの出エジプト

ヤコブとその息子たちの子孫はエジプトに住み続けた。ファラオ（パロ）は、増え続けるイスラエルの民を奴隷として重労働を課した。ヘブライ人として生まれながら王妃の養子として育てられたモーセは同胞を迫害するエジプト人を殺害し、その露見を恐れて、南パレスティナのミデアン地方に逃亡、そこで祭司エテロの娘と結婚し、羊飼いとして過ごす。ある日、燃える柴の中に神ヤハウェが現れ、エジプトで苦しむ同胞の解放者としての使命を与えられたモーセは、エジプトに戻る。ファラオは祭りのためにヘブライ人を荒れ野に連れ出したいというモーセの申し出を拒否し、ヘブライ人への労役を重くした。神はファラオの拒絶ゆえにエジプトに 10 の災いを与えた。ナイル川が血の色に染まり、蛙、ぶよ、アブが国を襲い、家畜が疫病にかかり、人が腫れ物に悩まされ、雹とイナゴが畑を壊滅させ、3日の間暗闇に覆われ、それでもかたくななファラオに対して、神はエジプトに最後の災厄を与えた。エジプトの初子がすべて、人も獣も疫病によって全滅してしまった。しかし、あらかじめ神の指示通りに小羊の血を入口に塗ったヘブライ人の家だけは災厄は起きずに過ぎ越した。自らも初子を失ったファラオは一度はヘブライ人を去らせることを認めたが、後で心変わりし、軍隊に後を追わせた。葦の海(紅海)の前でエジプトの軍に追いつかれそうになったとき、神は海に道を開き彼らを守った。さらに神はモーセに [] で十戒と律法を与えた。イスラエルの民は奴隷の身分から解放してくれた神との間に契約を結んだ。



ミケランジェロ作モーセ像

出エジプト記 34 章 29-31 節

モーセがシナイ山を下ったとき、その手には二枚の掟の板があった。モーセは、山から下ったとき、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。

アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見ると、なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかったが、

モーセが呼びかけると、アロンと共同体の代表者は全員彼のもとに戻って来たので、モーセは彼らに語った。

イエスの教え 補足プリント

イエスの慰めの物語

遠藤周作『イエスの生涯』(新潮文庫,1982)より

聖書のなかにはあまたイエスと見棄てられたこれらの人間との物語が出てくる。形式は二つあって、一つはイエスが彼らの病気を奇蹟によって治されたという所謂(いわゆる)「奇蹟物語」であり、もう一つは奇蹟を行うというよりは彼らのみじめな苦しみを分かちあわれた「慰めの物語」である。だが、聖書のこの二種類の話のうち、「慰めの物語」のほうが「奇蹟物語」よりはるかにリアリティを持っているのはなぜだろう。「奇蹟物語」よりも「慰めの物語」のほうがはるかにイエスの姿が生き生きと描かれ、その状況が眼に見えるようなのはなぜだろう。

たとえばルカ七章三十六節にこういう話がある。

「パリサイ派の人、イエスを食事に招きしが、イエスその家に入りて食卓につき給いし時、町に住む罪を犯せし一人の女(娼婦のこと)香油盛りたる器をもち来たり、……泪(なみだ)にてその御足を次第にぬらし」

その一節を読むだけで、我々はそこに描かれていないさまざまな状況をまぶたに浮かべることができる。

おそらくこの話に出てくる娼婦はマグダラか、その付近に住む貧しい娘だったのだろう。生きるために彼女はさまざまな男に体を与え、男たちはその体を弄(もてあそ)んでくせに彼女を蔑(さげす)みながら金を与えたのであろう。男と横になっている時、彼女は闇の中に空虚(うつろ)な眼をじっと見ひらいて身じろがなかつたろう。

イエスのことを彼女は誰に聞いたのだろうか。どうして彼女は彼をたずねようと思ったのだろうか。ひょっとすると、ある夜、自分を買った男から耳にしたのかもしれない。湖畔にじっと腰かけている疲れたような彼の姿を遠くから見たのかもしれない。

彼女はイエスがどんな人かは知らなかったにちがいない。ただその姿から言いようのない「やさしさ」を見ぬいたのだろう。自分の惨めさにも自分にたいする蔑みにもあまりに馴れていた彼女は、どんな人が本当の心のやさしさを持っているか本能的に感じたのだ。

イエスが食事をしている家がパリサイ派の男の家であったため、彼女はおそらくその中に入る時、下男たちから遮(さえぎ)られたであろう。パリサイ派の人たちには娼婦などは話しかけることも避けねばならぬ賤しい、恥ずべき女だった。旧約の世界では彼女たちはしばしば預言者たちの呪いの対象となっている。だから下男たちの制止をふりきって彼女は広間にはいり、食卓から驚いたようにふりむいた人々の視線を浴びながら、イエスの前まで一直線に歩いていったにちがいないのだ。

彼女は何も言わなかった。何も言わずイエスを見つめただけだった。やがてその眼から泪が溢(あふ)れでた。その泪だけで今日までの自分の哀しみを訴えた。「泪にてその御足をぬらし」という簡潔な表現がこのときの彼女の惨めさと苦しさとをはっきりと私たちに伝えてくれる。

その泪でイエスはすべてを知られた。この女がどんなに半生、人々から蔑まれ、自分で自分の惨めさを嘔みしめたかも理解された。その泪で充分だった。神がこの女を悦んで迎え入れるには、それで充分だった。

「もう、それでいい。わたしは……あなたの哀しみを知っている」

とイエスは彼女にやさしく答えた。彼がこの時、つぶやかれた言葉は聖書のなかでも最も美しいものの一つである。「この女は多く愛したのだ」そして、イエスは次のように言った。

多く愛するものは
多く許さるる……

この「慰めの物語」には数多くのイエス奇蹟物語よりも、はるかに生き生きとわれわれに訴えるものがある。「泪、次第にその足をぬらし」という女の悲しみの表現と「多く愛する者は多く許さるる」と女をゆるすイエスの静かな声とはわれわれを感動させずにはおかぬ響きがある。

もう一つ、別の「慰めの物語」を例にとろう。マルコや、ルカやマタイがそれぞれ記述している。長血を患う女の話である。

「ここに十二年、血漏を患える女ありて、あまたの医師にかかりて様々に苦しめられ、持てる物を悉（ことごと）く費やしたれど何の効（かい）もなく、却って益々、悪しかりしにイエスのことを聞きしかば、雑踏のうちより後ろに來たりて、その衣服に触れたり。……イエス、たれかわが衣服に触れしぞと問い給いければ、……」（マルコ、五の二十五）

これもガリラヤ湖畔のひとつの村で起こった出来事である。長血という不治の病にかかった女がその苦しきのあまり、イエスを見るために集まった群衆のかげにかくれ、その衣服におずおずと指に触れてみる。女にとっては藁をもつかむ気持ちだったのだろう。

おずおずと触れた指でイエスは彼女の今日までの苦しさをすべて、その藁をもつかみたい気持ちを感じとる。

「誰かが、私の服に触れた」

と彼は弟子をふりかえる。弟子たちは笑いながら答えた。

「これだけ、おびただしい人がいるのです。ぶつかるのも仕方がありますまい」

「いや、そうではない」 イエスは首をふられた。「誰かが私の衣服にふれたのだ」

そして自分を見つめている多くの顔のなかから彼は怯えた女の表情を発見する。

この物語はイエスが彼女の病を治すという奇蹟物語が混じてはいるが、私たちの心を動かすのは彼女の病気がイエスの奇蹟で治されたという結末よりも、おずおずと衣服に触れたその女の指一本から彼女の切ない苦しみのすべてを感じとったイエスである。たくさんの人々の蔭からそっと差しだされた女の指、衣にかすかにふれただけでイエスはふりむく。彼は彼女の苦しみのすべてがわかったのだ。我々にはその時の女の怯えた顔もイエスの辛そうな表情も、このおずおずとした指一本からはっきり想像できるのだ。

【よきサマリア人のたとえ】

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」

イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどう読んでいますか。」

すると彼は答えて言った。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。」

イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」

イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎとり、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。ところが、あるサマリア人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」

彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」

するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」（ルカ 10 : 25-37）

サマリア人：イスラエル人と、移民との間に生まれた人々。ユダヤ人にイスラエル人の血を穢した者といわれ迫害を受けていた。

レビ人：ユダヤ教団で祭司階級の下に置かれ、祭司に従属する職として教化活動などに携わった人々。

原始キリスト教 補足プリント

■ キリスト教会の誕生 五旬祭（ペンテコステ）

※ 五旬祭（ペンテコステ）：過越（エジプト脱出）から五十日目にシナイ山で十戒を受けたことを記念するユダヤ教の祭り ⇒ 聖霊がイエスの使徒たちに降った記念日

使徒言行録 2章 1節-42節

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

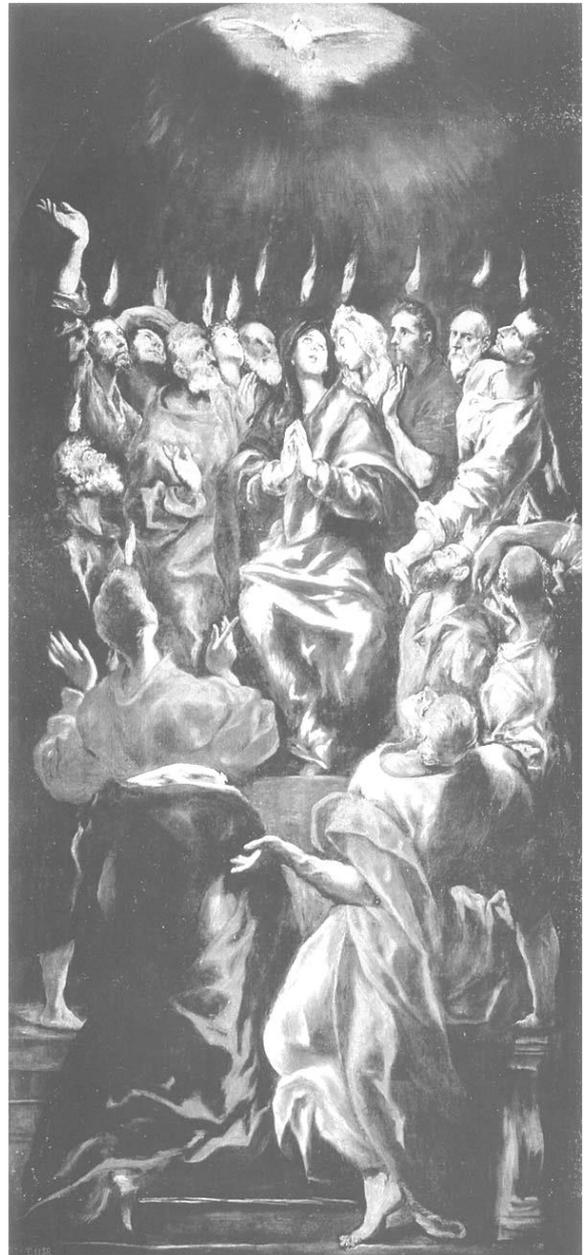
さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。

人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。

しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているわけではありません。そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。



『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしたためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。上では、天に不思議な業を、／下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。主の偉大な輝かしい日が来る前に、／太陽は暗くなり、／月は血のように赤くなる。主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたが

たに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおります。

このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまわれたのです。

しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。

ダビデは、イエスについてこう言っています。

『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、／わたしは決して動揺しない。／だから、わたしの心は楽しみ、／舌は喜びたてる。体も希望のうちに生きるであろう。／あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、／あなたの聖なる者を／朽ち果てるままにしておかれぬ。／あなたは、命に至る道をわたしに示し、／御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。

そして、キリストの復活について前もって知り、

『彼は陰府に捨てておかれず、／その体は朽ち果てることがない』
と語りました。

神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。

それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。

『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。／わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。』』

だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです。」

人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。

すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。

この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。

ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

初期教会の公会議——主に東方の教会で三位一体とキリスト論をめぐる論争

■ ニカエア公会議（325年、ローマ皇帝コンスタンティヌス1世召集）

アレクサンドロス（アレクサンドリア主教）の主張

子なるキリストが生まれた者ならば、子は創造された者であり、父なる神と子なるキリストが同質ではありえず、異質的(ヘテロウシオス)である。

アレクサンドロス（アレクサンドリア主教）の主張（助祭としてアタナシオスを伴う）

父なる神と子なるキリストはホモウシオス(同一本質：同質)である。

アタナシオス（アタナシウス）の主張

キリストは受肉した神のロゴスであり父とホモウシオス、さらに聖霊についてもその神性と父なる神との同質を説き、三位一体説を完成させた。この立場はキリスト教神学の正統となった。

⇒ ホモウシオス派のニカエア信条（三位一体の信仰を定めたもの）を採択し、アリウス派は追放

→しかし、アリウス派はニカエア公会議ののちも多数の解釈と信奉者を有し（皇帝コンスタンティヌスもアリウス派の洗礼を受ける）、ゴート人にも伝わる

※『教会史』の著者、カイサレアのエウセビオスも会議に出席、ホモウシオス説に疑問を持つ

■ コンスタンティノーブル公会議（381年、アリウス派論争終結のため皇帝テオドシウス1世召集）

アポリナリオスの主張（アポリナリオス主義）

キリストは人間としての肉体と魂を有するが、理性に当たるものは神のロゴスである。すなわち、肉体と魂から成るふつうの人間とは異なり、キリストの人性においては肉体と魂に起因する迷いも誤りもありえない。 ⇒ 反アリウス派だが、異端とされる

⇒ ニカエア信条が確認され、父なる神と子なるキリストが〈ホモウシオス(同一実体)〉であるとの定式が正統信仰として最終的に確立

■ エフェソス公会議（431年、ネストリウス問題の解決のために皇帝テオドシウス2世召集）

ネストリオス（コンスタンティノーブル主教）の主張

キリストの神性と人性の区別を明確にすべきであり（神人二つの位格を持つ）、聖母マリアは「神の母」ではなく「キリストの母」である。（反アポリナリオスの立場から）

キュリロス（アレクサンドリア主教）の主張

キリストにおける神性と人間性の緊密な合一「受肉した神なるロゴスの唯一の本性」

⇒ネストリオスの追放、

→ネストリオスを支持した東シリアのネストリウス派はペルシャから中国まで布教→景教

■ カルケドン公会議（451年、単性論派問題の解決のため皇帝マルキアヌス召集）

エウテュケスの主張（単性論）

キュリオスの説の発展。受肉以前のキリストにおける神性と人性の両性は、受肉後に神性が人性を吸収して単一の性になる

⇒キリスト両性説（神人両性一位格）を正統とし、単性論を異端として排除

→エジプト、シリア、パレスチナなどの東方諸教会は単性説を支持、現在でもコプト教会（エジプト）エチオピア教会、アルメニア教会などは単性論派教会

■ グレゴリウス（1世）Gregorius（540ころ—604）

ローマ教皇（在位 590～604）。聖人。西方の四大教会博士（アンブロシウス、ヒッポのアウグスティヌス、ヒエロニムス）の1人。大教皇 Magnus と称される。ローマ市の名門に生まれ、若くしてローマ市総督となったが、まもなく修道生活に入る。コンスタンティノープル駐在教皇使節、教皇顧問などを歴任後、意に反して教皇に選出され、最初の修道者出身の教皇となった。登位後は、ランゴバルド勢力の侵攻に対し、弱体化したビザンツ帝権にかわってローマ市および中部イタリアのローマ系住民の保護者の役を担った。アフリカ、西ゴート王国、ランゴバルド王国、フランク王国の諸教会を教皇座に緊密に結び付けようと努め、ケント王国に宣教師団を派遣してアングロ・サクソンの教化に先鞭(せんべん)をつけた。これらの業績によってグレゴリウスを「最初の中世的教皇」とよぶ人もいる。『司牧規則』『道徳論』『対話』をはじめ膨大な著作、説教、書簡があり、近代に至るまで西方キリスト教世界の精神に大きな影響を与えた。典礼改革を推進して「グレゴリウス典礼書」の形成に寄与し、また教会音楽の改良にも力を入れて、いわゆる「グレゴリオ聖歌」の形成過程に一定の役割を果たした。

『日本大百科全書』（小学館）

■ 聖像破壊（イコノクラスム）

字義的に、イコンすなわち聖画像の破壊を意味し、イコンの礼拝のみならず、その制作をも許されないとみなす思想。726 - 787年, 815 - 843年, ビザンティン皇帝たちによって国家の宗教政策とされ、この帝国における国家と教会との独特の関係を背景に(皇帝教皇主義), その経過で宗教以外の領域をも巻き込んで、歴史的な大事件となったばかりでなく、その余波は遠くカロリング朝フランク王国にまで及んだ。

レオ3世が726年, 当時特別尊崇をあつめていたコンスタンティノープルのハルコプラティア地区のキリスト像を撤去させ、730年勅令(偶像破壊令)をもってイコンは偶像だとしてその礼拝を禁止した背景には、ウマイヤ朝カリフ、ヤジード2世(在位720 - 724)の同趣旨の法令発布や、ユダヤ教, キリスト教異端パウルス派における、キリスト教徒を偶像崇拜主義者だとする批判の声のほか、キリスト教内部における長い論議があった。

神学的に議論が深化したのは第1期であり、イコン礼拝派には、8世紀前半, ダマスクスの修道士ヨハネスが現れ、キリスト本体論を論拠に、ロゴスの人間化ゆえにキリストのイコンは正しい、不可視の神は像化できないが、キリストは、神が人として現れたものであるゆえに像化できる、この人間化により物質は浄化され、物質もキリストを描くのにふさわしいものとなった、イコン礼拝はしたがってこの浄化に対する信仰告白を意味する、とした。

これに反駁したのがコンスタンティノス5世であり、キリストの像化はその神性の像化ゆえに許されない、キリストの唯一の真の像は聖餐でしかなく、ここにおいてのみ、像とその本体との同一性が保持されている、と主張した。

ビザンティン帝国のイコノクラスムは、時代的に、787年コンスタンティノス5世の母である摂政イレネのもとでニカエア公会議がイコン礼拝を復活してから、レオン5世が815年それを再び禁止するまでの一時期をはさんで、第1期, 第2期に分かれ、843年ミハエル3世の母である摂政テオドラが再びそれを復活して、イコノクラスムは最終的に終わった。

『世界大百科事典』（平凡社）

仏教の思想——人間の不幸と苦しみについて

◆防人の歌 【作詞】さだまさし 【作曲】さだまさし

おしえてください
この世に生きとし生けるものの
すべての生命に限りがあるのならば
海は死にますか、山は死にますか、
風はどうですか、空もそうですか、
おしえてください

私は時折苦しみについて考えます
誰もが等しく抱いた悲しみについて
生きる苦しみと老いてゆく悲しみと
病の苦しみと死にゆく悲しみと
現在の自分と

答えてください
この世のありとあらゆるものの
すべての生命に約束があるのなら
春は死にますか、秋は死にますか、
夏が去る様に冬が来る様に
みんな逝くのですか、

わずかな生命のきらめきを信じていいですか、
言葉で見えない望みといったものを
去る人があれば来る人もあって
欠けてゆく月もやがて満ちて来る
なりわいの中で —後略—

◆仏教思想に見られる「苦」

四法印：仏陀の悟った4つの法（ダルマ：正しい教え＝真理）

一切皆苦：人生のすべては苦であること

諸行無常：すべてのものは常に変化しとどまることがないこと

諸法無我：すべての存在（法）には固定的な実体がないこと

涅槃寂靜：煩惱を離れ、苦を滅した悟りの境地が涅槃であること

四諦：仏陀の悟った4つの諦（サティア：真理・真実）

苦諦：人生は苦しみであること

集諦：苦しみの原因は渴愛（欲望）・煩惱（悪しき心）であること

滅諦：煩惱が消え、苦しみが滅したところに涅槃の境地があること

道諦：涅槃に到達する道が八正道であること

四苦：生、老、病、死

八苦：四苦に加えて、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦

ワークシート 苦しみとは何か 3年 組 番 氏名

◆人間にとって「苦しみ」とはどのようなことだと思いますか。あなたの考えを書いてください。

- グループを作ったら、すぐに発表者を一人決めてください。
 - グループで各メンバーは「苦しみ」についての考えを発表してください。
 - すべてのメンバーが発表した後、その発表を聞いて気づいたことをグループの中で話し合ってみてください。
- ◆あなたのグループでは「苦しみ」とは何かについて、どのようなことに気づきましたか。話し合った内容をまとめてください。

◆【授業の振り返り】あなたの「苦しみ」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

中国思想の人性論——人間の本性とはどのようなものか

◆人間なんて 【作詞】吉田拓郎 【作曲】吉田拓郎

人間なんてラララ ラララララ
人間なんてラララ ラララララ

何かがほしいおいら
それがなんだかわからない
だけど何かたりないよ
いまの自分もおかしいよ

そらにうかぶ雲は
いつかどこかへとんでゆく
そこになにかがあるんだろうか
それは誰にもわからない
※人間なんてラララ ラララララ
人間なんてラララ ラララララ

(※くり返し)

◆中国思想の人性論に見られる「性」

人性論：人間の本性がどのようなものであるかについての論考

性：人間が生まれながらにもつ性質

『論語』：「性相近し、習い相遠し。(人間は生まれながらの本性はそれほど変わらないが、学習によってずいぶん違ったものになる)」

『中庸』：「天の命ずるをこれ性と謂い、性に率うをこれ道と謂い、道を修むるをこれ教えと謂う。(天の命令するものを性(生まれつき備わる性質)といい、その性にしたがって行うことを道といい、その道を修得することを教えというのである)」

告子(墨家)：「性には善なく不善なし」と主張したことで知られる。告子の性とは生まれつきの本能をいい、食欲や性欲を主要素と考えているが、「性は渦を巻いて流れる水のようなもので、東の方へ堤を切り開くと水は東へ流れ、西の方へ切り開くと西へ流れる。性に善悪の区別がないのは、水に東西の区別がないようなものである」と説いた。

孟子(儒家、性善説)：人間は生まれながらに「良知良能(善を知り、それをなす能力)」と四端(惻隠(あわれみいたましく思う)、羞悪(不善をはじにくむ)、辞讓(目上にへりくだり譲る)、是非(正邪を判断する))を持つ。四端が四徳(仁義礼智)のもととなるがゆえにその本性は善である。それでは、性の善なる人間が、悪事をはたらくことがあるのはなぜか。それはおかれた環境による。

荀子(儒家、性悪説)：「人の性は悪なり、その善なる者は偽なり」偽とは、作為のことで、後天的努力をいう。人は無限の欲望をもち、放任しておけば他人の欲望と衝突して争いを起こし、社会は混乱におちいるであろう。放任しておくとも悪にむかう人の性、それは悪といわざるをえない。性の悪なる人間を善に導くためには、作為によって規制しなければならない。

ワークシート 人間の本性とは何か 3年 組 番 氏名

◆人間の本性はどのようなものだと思いますか。あなたの考えを書いてください。

- グループを作ったら、すぐに発表者を一人決めてください。
 - グループで各メンバーは「人間の本性」についての考えを発表してください。
 - すべてのメンバーが発表した後、その発表を聞いて気づいたことをグループの中で話し合ってみてください。
- ◆あなたのグループでは「人間の本性」とは何かについて、どのようなことに気づきましたか。話し合った内容をまとめてください。

◆【授業の振り返り】あなたの「人間の本性」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

哲学カフェ1 テーマ 人間にとって知とは何か

今回の授業は、哲学カフェスタイルの授業を行います。これまでのアクティブラーニング型授業のように、机を6つの島にくっつけて、お茶やジュースでも飲みながら意見の交換をしましょう。このページには「人間にとって知とは何か」を考える材料を少しだけ掲載しておきます。

◆「知」についてこれまでに学んだこと

ギリシア哲学において、哲学（ΦΙΛΟΣΟΦΙΑ）とは知恵を愛し求めること

プラトンは知恵、勇気、節制、正義を四元徳とした

人間の学名 ホモ・サピエンス（Homo sapiens）とは「知恵のあるヒト」の意味

◆フランシス・ベーコン（1561～1626 イギリス）の語る知

「知は力なり」（scientia est potentia）⇒知によって自然を征服する

人間は、自然に奉仕するものであり自然を解釈するものであるが、彼は自然の秩序について、実際に観察したか精神によって観察したことだけを為しかつ理解する。

…素手や放任された知性はたいしたことができない。道具や補助手段によって物事はなしとげられるのであって、手にとって同様知性にとってもそれらは必要である。

…人間の知と力は一つに合する。原因が知られなくては結果は生じないからである。というのは、自然は服従することによってでなくては征服されないのであって、考察において原因にあたるものは、制作においては規則である。

フランシス・ベーコン『ノヴム・オルガヌム』

◆ジャン・ジャック・ルソー（1712～78 フランス）の語る知

「知識は危険な武器として墮落の道具になりかねない」

なんらの結果もないところには、探求すべき原因はない。しかし、この場合、結果は確実であり、墮落は現実的である。そして、われわれの魂は、われわれの学問と芸術が完成に向かって前進するにしたがって腐敗した。人はそれがわれわれの時代に特有な不幸であると言うだろうか。いや、われわれの好奇心によって引き起こされた害悪は世界と共に古いのだ。…人びとは学問、芸術の光がわれわれの地平線上にのぼるにつれて、美德が逃れ去るのを見た。そして同じ現象があらゆる時代、あらゆる場所において観察されたのだ

ジャン・ジャック・ルソー『学問・芸術論』

■ 哲学カフェのルールは以下の通りです

意見を述べたい人は挙手をしてください。

意見を述べた人に対して質問をしたい時も挙手をしてください。

複数の挙手があった場合は進行役が指名しますのでそれから意見を述べてください。

意見を述べている人の話が続けているうちは挙手をしないでください。

意見を述べる前に近くの人と相談してもかまいません。

ワークシート 人間にとって知とは何か 3年 組 番 氏名

◆人間にとって「知」とは何だと思えますか。あなたの考えを書いてください。

■まずは10分間かけて、いつものように自分の考えをまとめてみよう。

■自分の意見を発表したい人や、意見に対して質問をしたい人はどんどん挙手をして発言しよう。

◆このクラスで出てきた印象的な意見をここに書いておきましょう。

■残り10分で今回の哲学カフェを振り返って考えてみよう。

◆【授業の振り返り】あなたの「人間の知」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

哲学カフェ2 テーマ 人間にとって美とは何か

2回目の哲学カフェスタイルの授業です。まずは、10分間「洞窟の哲学」として、裏面に自分の考えた意見を書き込んでから、これまでのアクティブラーニング型授業のように、机を6つの島にくっつけて、お茶やジュースでも飲みながら意見の交換をしましょう。このページには「人間にとって美とは何か」を考える材料を少しだけ掲載しておきます。

◆「美」についてこれまでに学んだこと

善美（カロカガティア）とは、ギリシア語の二つの形容詞〈カロス kalos（美しい）〉と〈アガトス agathos（善い）〉をつないだ合成語

「調和」を重んじたピタゴラス学派において、善と美とは原理的に同一のものの2相ととらえられ、心身の調和的発達による善美の実現こそ、人間完成の理想とするギリシアの教育観へ受け継がれた。

◆プラトンの語る美

美そのもの（美のアイデア）以外に何か美しいものがあるなら、それは他ならぬ美そのものを分有していることによって美しい。

プラトン『パイドン』

◆カント（1724～1804 ドイツ）の語る美

我々が咲いているバラの花を見て美しいと感じるとき、ふと一緒に傍らで見ている他人にその気持ちを伝えたいと欲し、また当然彼も自分と同じ気持ちでいるだろうと期待するときのことを思い起こせば、このこと（美しいと感じる感覚があらゆる人に共通していること）はごく自然に理解されるだろう。そしてまた、心性の状態を伝達できることが快を伴うことは、人間の社交性に向かう自然的性癖から容易に説明されうることでもある、とカントも説明している。

志水紀代子「美学的判断力と目的論的判断力——自由実現をめぐる」『カント読本』

■ 哲学カフェのルールは以下の通りです

意見を述べたい人は挙手をしてください。

意見を述べた人に対して質問をしたい時も挙手をしてください。

複数の挙手があった場合は進行役が指名しますのでそれから意見を述べてください。

意見を述べている人の話が続けているうちは挙手をしないでください。

意見を述べる前に近くの人と相談してもかまいません。

ワークシート 人間にとって美とは何か 3年 組 番 氏名

◆人間にとって「美」とは何だと思えますか。あなたの考えを書いてください。

■まずは10分間かけて、いつものように自分の考えをまとめてみよう。(洞窟の哲学)

■自分の意見を発表したい人や、意見に対して質問をしたい人はどんどん挙手をして発言しよう。
(広場の哲学)

◆このクラスで出てきた印象的な意見をここに書いておきましょう。

■残り5分で今回の哲学カフェを振り返って考えてみよう。

◆【授業の振り返り】あなたの「人間にとっての美」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

